特別支援教育

「共に学び，共に育つ教育」の推進に関する研究

ー「交流籍」を活用した交流及び共同学習の取組の検証を通してー

≪研究協力校≫
北上市立いわさき小学校
花巻市立南城中学校

平成２６年３月

岩手県立総合教育センター
教育支援相談担当
木村　史彦
森　和佳子
島香　実
近藤　健一
佐々木　一義
最上　一郎
大谷　哲弘
高橋　雅恵
長期研修生
安達　史枝

≪目　次≫

Ⅰ　研究目的 …… 1
Ⅱ　研究の内容と方法 …… 1
　1　研究の内容と方法 …… 1
　2　研究協力校 …… 1
Ⅲ　研究結果の分析と考察 …… 2
　1「共に学び，共に育つ教育」の推進に関する基本構想 …… 2
　(1)　「共に学び，共に育つ教育」の推進に関する基本的な考え方 …… 2
　(2)　岩手県における平成24年度「交流籍」を活用した交流及び共同学習に関する検証の必要性 …… 4
　(3)「共に学び，共に育つ教育」の推進に関する基本構想図 …… 5
　2　岩手県における平成24年度「交流籍」を活用した交流及び共同学習の取組の検証 …… 6
　(1)　検証の目的 …… 6
　(2)　検証の方法 …… 6
　(3)　検証の結果 …… 8
　(4)　検証を受けて …… 9
　3　「交流籍」を活用した交流及び共同学習を計画的・組織的に推進するための手立て …… 10
　(1)　「交流籍」を活用した交流及び共同学習に対する理解 …… 10
　(2)　相互の学校体制づくり …… 10
　(3)　計画的・具体的な事前打合せの実施 …… 11
　(4)　具体的な学習内容や活動内容の工夫 …… 12
　4　「交流籍」を活用した交流及び共同学習を計画的・組織的に推進するための手立てを取り入れた実践 …… 12
　(1)　実践の概要 …… 12
　(2)　北上市立いわさき小学校における実践① …… 12
　(3)　北上市立いわさき小学校における実践② …… 13
　(4)　花巻市立南城中学校における実践① …… 14
　(5)　花巻市立南城中学校における実践② …… 15
　5　実践結果の分析と考察 …… 17
　(1)　アンケート調査の目的と内容 …… 17
　(2)　調査結果の分析と考察 …… 18
　6　「共に学び，共に育つ教育」の推進に関する研究のまとめ …… 22
　(1)　成果 …… 22
　(2)　課題 …… 22
　7　「交流及び共同学習ガイドブック」の作成 …… 22
　(1)　作成のねらい …… 22
　(2)　内容と構成 …… 22
　(3)　活用方法 …… 23
Ⅳ　研究のまとめ …… 23
　1　研究の成果 …… 23
　2　今後の課題 …… 24
　＜おわりに＞
　【引用文献】
　【参考文献】

Ⅰ　研究目的

障がいのある人もない人も，相互に人格と個性を尊重し支え合う「共生社会」の形成に向けて，国においては，平成19年に障害者権利条約に署名し，批准に向けた取組が進められてきている。教育に関しては，中央教育審議会特別委員会での議論を基にしながら，インクルーシブ教育システムの構築に向けた取組が着実に進められてきている。本県においては，平成20年に「共に学び，共に育つ教育」の推進を掲げ，特別支援学校在籍児童生徒の居住地校との交流及び共同学習について，ガイドラインの作成や指定校による試行など，具体的な取組を行ってきている。平成24年度からは，小学部・中学部を設置するすべての県立特別支援学校において，副次的な籍「交流籍」を活用した交流及び共同学習を本格実施している。このことにより，地域における共生社会の形成に向けたインクルーシブな教育への理解も進むものと期待している。

しかしながら，交流及び共同学習の意義や交流籍に関する理解が十分になされず，事前の打ち合わせ等がスムーズに行われないまま実施されている現状も見られる。そのため，今後は，各校における居住地校交流などの位置付けの確認や内容等についても改善を図り，教育事務所と市町村教育委員会における周知理解と協力を行いながら，取組を一層充実していくことが求められる。

そこで，本研究は，平成24年度の「交流籍」を活用した交流及び共同学習の取組を検証し，成果と課題について明らかにしていく。また，それらを踏まえて，交流及び共同学習を計画的・組織的に実施するための取組やその進め方を提示することを通して，「共に学び，共に育つ教育」の推進に資するものである。

なお，研究成果物として，居住地校交流や居住地交流等の内容も含めた「交流及び共同学習ガイドブック」を作成し，研究成果の普及の一助とする。

Ⅱ　研究の内容と方法

１　研究の内容と方法

(1)　研究の基本構想の立案（文献法）

(2)　手立ての試案の作成

(3)　研究協力校による実践

(4)　実践結果の分析と考察（質問紙法，記録法）

(5)　研究のまとめ

２　研究協力校

北上市立いわさき小学校

花巻市立南城中学校

Ⅲ　研究結果の分析と考察

１　「共に学び，共に育つ教育」の推進に関する基本構想

(1)　「共に学び，共に育つ教育」の推進に関する基本的な考え方

ア　「共に学び，共に育つ教育」

「共に学び，共に育つ教育」は，特別支援教育の充実・発展に欠かせない理念であり，その実現に向けて具体的な取組を進めていく必要がある。

平成24年７月に中央教育審議会初等中等教育分科会に提出された「特別支援教育の在り方に関する特別委員会」報告では，共生社会の形成に向けて，障がいのある者と障がいのない者が共に学ぶ仕組みであるインクルーシブ教育システムの構築の必要性が提言された。インクルーシブ教育システムを構築するために，特別支援教育を発展させていく必要性も述べられている。

岩手県では，平成20年に「岩手県における今後の特別支援教育の在り方」に関する最終報告において，「共に学び，共に育つ教育」を基本的理念として打ち出している。また，平成21年に策定された「いわて特別支援教育推進プラン」においては，「共に学び，共に育つ教育」の目指す姿として「幼児児童生徒一人一人がたとえ障がいがあったとしても，身近な地域の学校で，それぞれの教育的ニーズに応じた教育を受けることができ，その結果として，どの幼児児童生徒も学校生活において生き生きと自己実現が図られる姿」と規定している。この姿を目指して幼稚園，小・中学校，高等学校，特別支援学校がそれぞれの場に応じて取組を行っていくことが必要とされている。

イ　交流及び共同学習

「共に学び，共に育つ教育」の実現に向けた一つの取組に交流及び共同学習がある。交流及び共同学習の充実は，「共に学び，共に育つ教育」の推進に役立つものである。

交流及び共同学習とは，相互のふれ合いを通じて豊かな人間性をはぐくむことを目的とする交流の側面と，教科等のねらいの達成を目的とする共同学習の側面があり，両方の側面が一体としてあることを明確に表したものである。この二つの側面を分かちがたいものとして捉え，推進していくものである。

交流及び共同学習は，平成16年に改正された障害者基本法において規定されたことから始まっており，幼稚園，小・中学校，高等学校，特別支援学校の現行学習指導要領にも位置付けられ，全ての学校種において，共に活動する機会を設定することとされている。

前述した「特別支援教育の在り方に関する特別委員会」報告でも，交流及び共同学習は「障害のある児童生徒にとっても，障害のない児童生徒等にとっても共生社会の形成に向けて，経験を広め，社会性を養い，豊かな人間性を育てる上で，大きな意義を有するとともに，多様性を尊重する心を育むことができる」などと意義や充実の必要性が述べられている。

岩手県では，平成21年に策定した「いわて特別支援教育推進プラン」の中に，特別支援学校児童生徒の居住地校との交流及び共同学習を実施していくことが記載され，居住地に住む児童生徒と共に活動することで，相互理解や地域との結びつきを強くするための取組が進められてきている。

このように，交流及び共同学習は，社会を構成する様々な人々と共に助け合い支え合って生きていくことを学ぶ大切な機会であり，「共に学び，共に育つ教育」の実現に向けて，重要な役割を担っている。

ウ　「交流籍」を活用した交流及び共同学習

(ｱ)　居住地校との交流及び共同学習

特別支援学校における居住地校との交流及び共同学習は,障がいのある児童生徒の居住する地域とのつながりを深めるものであり，地域の中で共に生きていく社会の形成を目指す上で，欠かせない学習である。

特別支援学校に在籍する児童生徒の多くは，居住する地域と遠く離れた特別支援学校に就学しており，地域と日常的なかかわりをもつことが難しいなどの課題がある。それらの課題を解決するための取組として，居住地校交流が行われてきている。

居住地校交流の取組は，全国的に広がってきており，一部の自治体では，居住する地域とのかかわりを促進するための方策として，居住地校に副次的な籍を置き，地域の理解を広げ，結びつきを強めようとしている。

(ｲ)　岩手県における「交流籍」を活用した交流及び共同学習

岩手県においても，副次的な籍である「交流籍」を設定し，居住地校との交流及び共同学習が進められてきている。地域とのかかわりを充実させ,「共に学び，共に育つ教育」の実現に向けて，今後さらに，計画的・組織的に推進していくことが求められている。

「交流籍」を活用した交流及び共同学習は，居住地校だけではなく，教育事務所や市町村教育委員会もかかわりながら進めていくものである。そのため，充実した取組が行われることにより，特別支援学校で学ぶ児童生徒が居住地域で生活していくためのつながりを継続的に維持・促進していくことができるメリットがある。

また,「いわて特別支援教育推進プラン」では，平成21年度以降，ガイドラインの作成が行われ，交流籍を設定し，居住地校との交流及び共同学習が試行されてきた。平成24年度には，小・中学部があるすべての県立特別支援学校において,「交流籍」を活用した交流及び共同学習が実施された。

実施状況としては，小学部児童182名，中学部生徒58名が実施し，在籍数との割合は小学部45％，中学部は18％であった。また，交流籍を置いて実施した学校数は，小学校118校，中学校40校であった。各特別支援学校からは,実施回数や活動内容に加え，成果と課題など１年間の取組の実施状況が報告されている。

報告された課題を見ると，交流籍に関する理解が十分になされていない現状がうかがえる。また，交流及び共同学習に対する学校としての意義や位置付けが不明確であったり，事前の打合せ等がスムーズに行われないまま実施されたりしている様子も見られる。

これらの状況を改善するには,「交流籍」を活用した交流及び共同学習を計画的・組織的に推進していくことが必要である。具体的には，その意義や目的を確認し，教育課程に位置付けたり，年間指導計画を作成したりするなど学校としての体制づくりを図っていく。また，同じ目的意識のもと，具体的な学習内容や活動内容を検討する必要があり，その検討をすすめる事前の打合せの内容や方法についても共通理解を図り，継続した取組ができるようにしていく必要がある。

「交流籍」を活用した交流及び共同学習が充実するためには，交流籍を指定する手続きなどでかかわっている教育事務所と市町村教育委員会とのより強い連携が不可欠である。

(2)　岩手県における平成24年度「交流籍」を活用した交流及び共同学習に関する検証の必要性

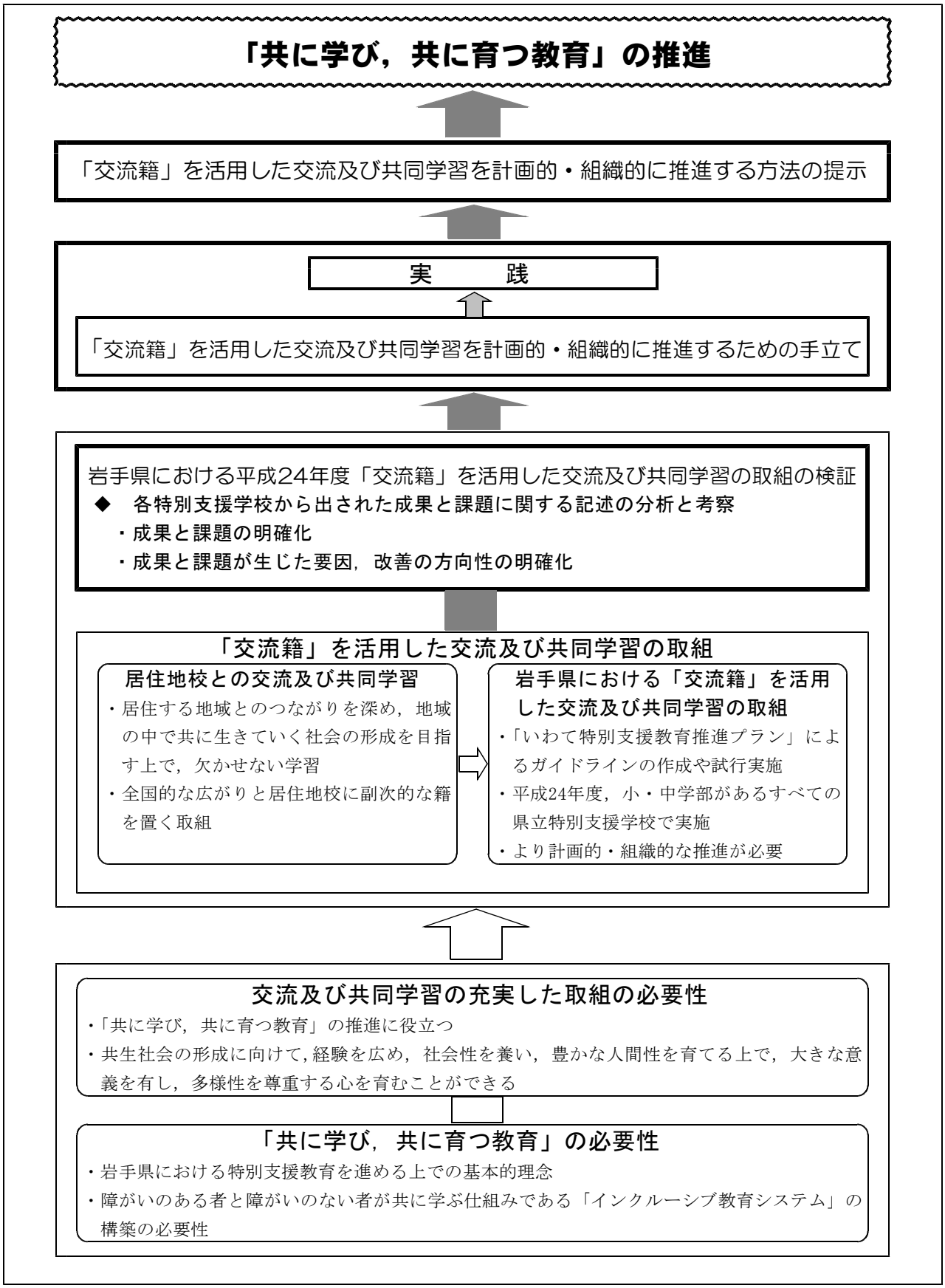
「交流籍」を活用した交流及び共同学習を，より計画的・組織的に推進していくために，平成24年度の取組について検証を行い，成果と課題を明らかにし，それらを踏まえて今後の進め方について提示していきたいと考える。

そこで，各特別支援学校から出された成果と課題の記述を分析・考察し，取組全体の成果と課題を整理していく。その際，結果だけではなく，なぜ成果につながったのか，なぜ課題が生じたのか要因についても，明らかにしていくことが大切である。また，改善の方向性について，明確にすることも必要である。

成果と課題及びその要因，改善の方向性を明らかにし，計画的・組織的に推進していくための手立ての設定につなげていく。

(3)　「共に学び，共に育つ教育」の推進に関する基本構想図

これまで述べてきた基本的な考え方を踏まえ，「共に学び，共に育つ教育」の推進に関する基本構想図を５頁の【図１】に示した。



【図１】「共に学び，共に育つ教育」の推進に関する基本構想図

２　岩手県における平成24年度「交流籍」を活用した交流及び共同学習の取組の検証

(1)　検証の目的

平成24年度の取組について，成果と課題を明らかにするとともに，成果と課題それぞれの要因，改善の方向性を明確にし，「交流籍」を活用した交流及び共同学習を計画的・組織的に推進するための手立ての設定に役立てる。

(2)　検証の方法

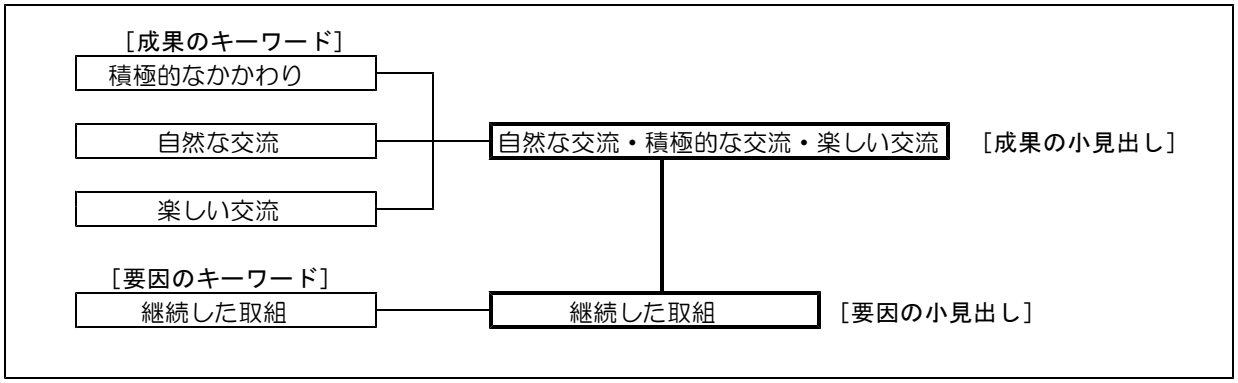
各特別支援学校から出された成果と課題の記述から，成果や課題等と思われるキーワードを抽出し，整理した。記述から複数の成果や課題が読み取れる場合には，それぞれの成果や課題に分けて進めた。

成果については，成果と要因という視点からキーワードを抽出した。(【表１】)

その後，それぞれ関連するキーワードをグループ化して小見出しを付け，成果としてあげられることとその要因を整理した。(【図２】)

【表１】各特別支援学校の成果の記述と抽出した成果と要因のキーワード（例）

各特別支援学校の成果の記述	成　果	要　因
継続して取り組んできたことで，交流校の児童と本校児童とが互いに積極的にかかわっている様子が見られた。	積極的なかかわり	継続した取組
回数を重ねることで環境や人に慣れ，自然に集団に交じることができた。	自然な交流	継続した取組
継続した取組により，本校と小・中学校ともに児童がなれてきて楽しく交流できた。	楽しい交流	継続した取組



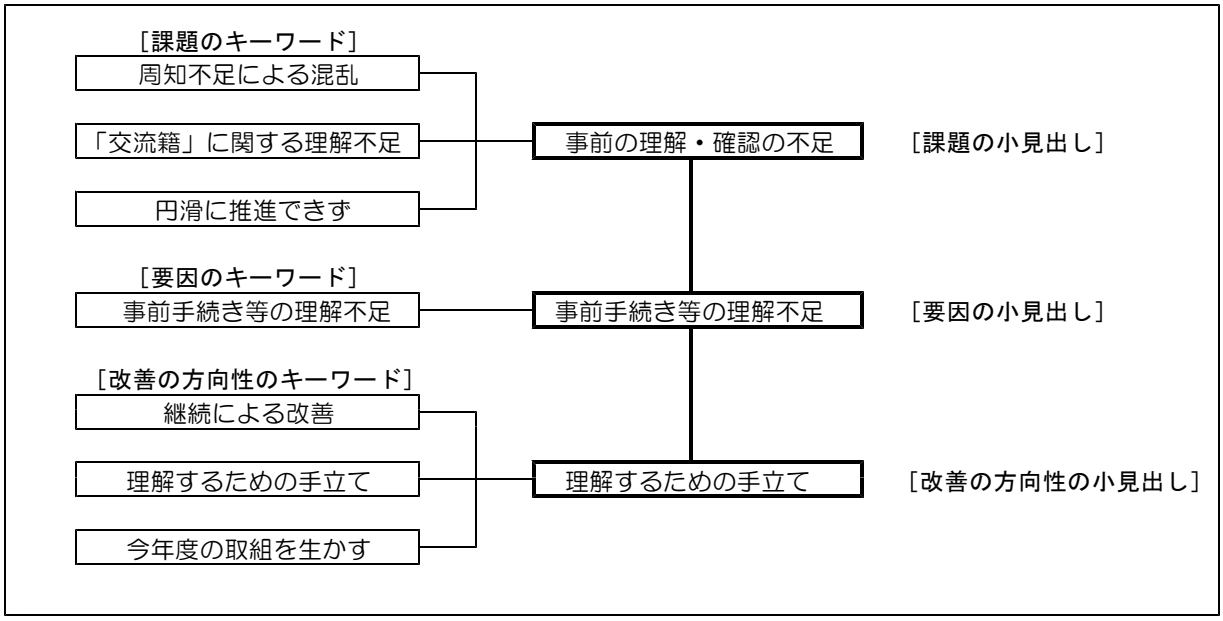
【図２】成果にかかわる関連するキーワードとグループ化した小見出し（例）

課題については，課題，要因，改善の方向性という視点でキーワードを抽出した。（【表２】）

その後，それぞれ関連するキーワードをグループ化して小見出しを付け，課題とその要因，改善の方向性を整理した。（【図３】）

【表２】各特別支援学校の課題の記述と抽出した課題，要因，改善の方向性のキーワード（例）

各特別支援学校の課題の記述	課　題	要　因	改善の方向性
手続きの流れや，計画書，報告書の作成等，まだ十分に周知されておらず混乱することもあったが，今後継続していく中で，改善されていくと思う。	周知不足による混乱	事前手続き等の理解不足	継続による改善
「交流籍」の仕組みについて認識しないまま，交流及び共同学習を進めてしまった。双方で研修もしくは認識しなければならないと感じた。	「交流籍」に関する理解不足		理解するための手立て
「交流籍」が実施初年度ということで，手続きに時間がかかり，円滑に進めることが難しかった。今年度の実施を受けて，次年度に生かしていきたい。	円滑に推進できず	事前手続き等の理解不足	今年度の取組を生かす



【図３】課題にかかわる関連するキーワードとグループ化した小見出し（例）

(3)　検証の結果

ア　成果

成果と要因に関するキーワードを抽出し，関連するキーワードのグループ化を図り，小見出しをつけて整理した成果と要因は【表３】のとおりである。

成果については，自然な交流・積極的な交流・楽しい交流，児童生徒の成長・発達，児童生徒の相互理解，教員間の共通理解，地域でのつながりの深まりの５点にまとめることができた。

要因を見ると，継続した取組，事前の打合せの実施，活動内容等の工夫，小・中学校の支援が複数の成果の要因としてあげられており，「交流籍」を活用した交流及び共同学習を進める上で，必要な事項であることが明らかになった。

事前の打合せが十分になされることで，活動内容等の工夫や，継続した取組につながることも推測されることから，「交流籍」を活用した交流及び共同学習を進めるには，特にも事前の検討や共通理解の在り方が重要なポイントになると考える。

【表３】岩手県における平成24年度「交流籍」を活用した交流及び共同学習の成果と要因

成　　果	要　　因
自然な交流・積極的な交流・楽しい交流	継続した取組
	活動内容の工夫
	小・中学校の支援
	事前打合せによる検討・確認
児童生徒の成長・発達	継続した取組
	集団での活動
	小・中学校の支援
児童生徒の相互理解の推進	継続した取組
	事前・事後の交流
	活動時間や活動内容の工夫
教員間の共通理解	事前打合せの設定と実施
地域でのつながりの深まり	地域行事への参加
	保護者の協力

イ　課題

課題と要因，改善の方向性に関するキーワードを抽出し，関連するキーワードのグループ化を図り，小見出しをつけて整理した結果は９頁の【表４】のとおりである。

課題については，事前の理解・確認不足，日程調整の困難さ，支援学校校内体制の不備，小・中学校の負担，活動内容や参加方法の工夫の５点にまとめることができた。

要因を見ると，事前の手続き等の理解不足，事前の日程調整が困難，複数児童の交流日が重複などが挙げられている。事前の段階で計画的に進められなかったことが影響していると考える。

改善の方向性を見ると，「交流籍」を活用した交流及び共同学習に対する理解するための手立て，事前打合せの設定と内容，具体的な学習内容や活動内容等の検討・工夫が挙げられている。また，支援学校校内体制の不備，小・中学校の負担という課題に対して，適切な計画の作成と確認，無理のない交流という改善の方向性が出されており，事前の計画作成も含めた双方の学校体制づくりも必要と考える。

今回の検証で明らかになった改善の方向性は，計画的・組織的に推進する上での重要なポイントになると考える。

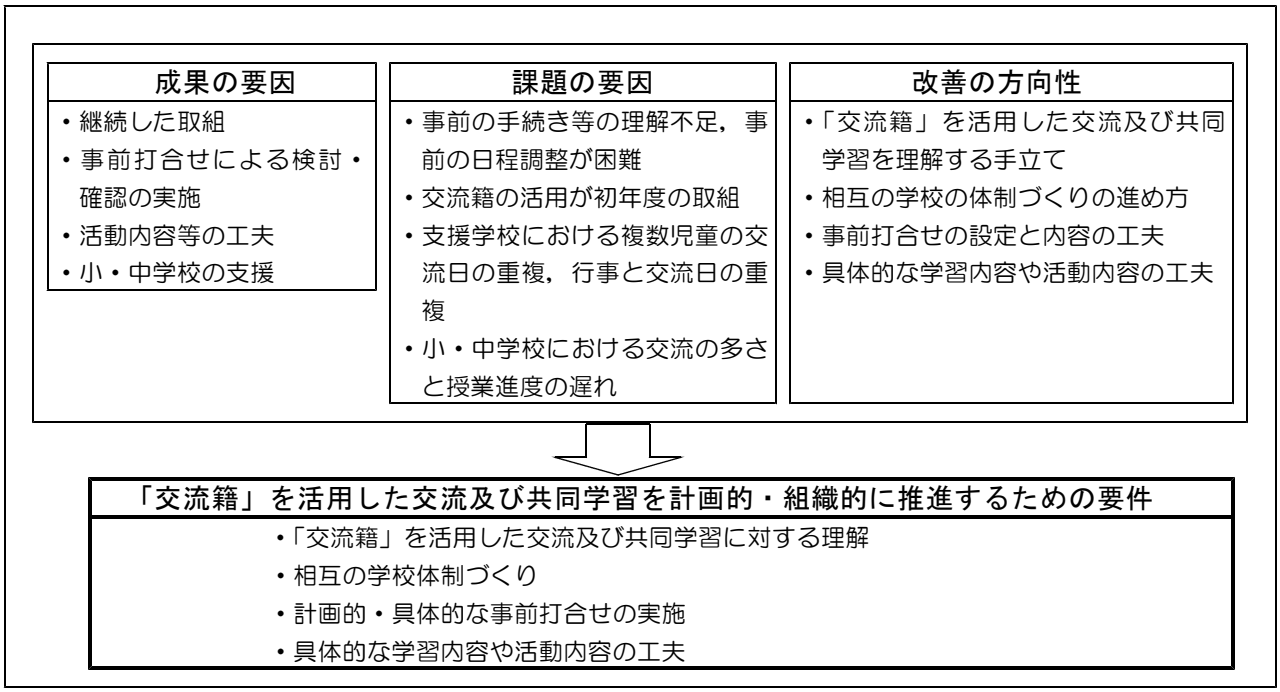
【表４】岩手県における平成24年度「交流籍」を活用した交流及び共同学習の課題と要因，改善の方向性

課　　題	要　　因	改善の方向性
事前の理解・確認の不足	事前の手続き等の理解不足	交流及び共同学習を理解する手立て
	事前の日程調整が困難	事前打合せの設定と内容の工夫
日程調整の困難さ	交流籍の活用が初年度の取組	学習内容や活動内容の検討
		実施回数の検討
支援学校校内体制の不備	複数児童の交流日の重複	適切な計画の作成と確認
	行事と交流日の重複	
小・中学校の負担	交流の多さ	無理のない交流
	授業進度の遅れ	
活動内容や参加方法の工夫		事前打合せの設定と内容
		学習内容や交流方法等の検討，工夫

(4)　検証を受けて

「交流籍」を活用した交流及び共同学習を計画的・組織的に推進するための手立ての設定に役立てたいと考え，検証を進めてきた。その結果，平成24年度の成果と課題を明らかにするとともに，成果と課題が生じた要因，改善の方向性を明らかにすることができた。

検証で明らかになった成果の要因，課題の要因，改善の方向性を整理し，「交流籍」を活用した交流及び共同学習を計画的・組織的に推進するための要件と考えたものが【図４】である。



【図４】「交流籍」を活用した交流及び共同学習を計画的・組織的に推進するための要件

四つの要件に即して，より計画的・組織的に「交流籍」を活用した交流及び共同学習を推進するための手立てを具体的に設定していく。

３　「交流籍」を活用した交流及び共同学習を計画的・組織的に推進するための手立て

「交流籍」を活用した交流及び共同学習を計画的・組織的に推進するための四つの要件に即して具体的な取組の手立てを【表５】のように設定した。

【表５】「交流籍」を活用した交流及び共同学習を計画的・組織的に推進するための手立て

○　「交流籍」を活用した交流及び共同学習に対する理解 ・基本的な理解を推進するための資料を活用し，共通理解を図る
○　相互の学校体制づくり ・校内体制を整備する ・交流及び共同学習の目標やねらいを明確にし，教育課程へ位置付ける
○　計画的・具体的な事前打合せの実施 ・打合せの内容を明確にする ・できるかぎり直接会って打合せを行う ・両校の児童生徒について具体的に情報交換を行う ・授業用打合せシートを活用する
○　具体的な学習内容や活動内容の工夫 ・特別支援学校の児童生徒が得意な活動や興味関心がある活動を取り入れる ・両校の児童生徒が主体的に活動できるような工夫をする ・評価記録シートを活用する

(1)　「交流籍」を活用した交流及び共同学習に対する理解

ア　基本的な理解を推進するための資料を活用し，共通理解を図る

「交流籍」を活用した交流及び共同学習を理解するにあたっては，目的や意義等が書かれてある資料を活用することが有効と考える。

交流及び共同学習は，「交流籍」のある児童生徒を担当する教員だけが理解して行うものではなく，校長や副校長をはじめ，すべての教員の共通理解が図られた上で行われるべきものである。共通理解を図るためには，学校ごとに検討・確認する場や研修会等が必要である。それらを実施する際，「交流籍」に関する基本的な考え方や手続きの方法などが記載されている資料を，新たな情報として読み取ったり，学校の課題と照らし合わせて読み取ったりすることで，教員の理解が深まり共通理解が図られやすくなると考える。

(2)　相互の学校体制づくり

ア　校内体制を整備する

「交流籍」を活用した交流及び共同学習は，各学校において，校長のリーダーシップの下，校内体制を整えて推進していくことが大切である。

特別支援学校では，担任が交流及び共同学習に参加することが多く，校内の授業への教員の補充が必要となってくる。さらに，複数の児童生徒の交流日が同日に重なると，多くの教員が出かけることになり，校内で授業を行う教員の負担が大きくなる。また，受け入れる小

・中学校では，計画的に進めないと，授業の進度が遅れるなど，学校の活動に支障をきたし，担当者の負担だけが大きくなることもある。

これらの課題を解決するためには，交流及び共同学習の具体的な取組や内容等を検討し，計画的・組織的な推進に向けて校内の推進組織を明確に位置付け，整備することが必要である。特別支援学校は，現在ある分掌を活用し，担当を明確に位置付けながら，日程調整や教員の補充体制を整え，小・中学校では，特別支援教育に関する校内委員会の取組の一つとして位置付けを明確にするなど，担任一人に任せず，チームの取組として情報を共有し推進するシステムを機能させることが必要である。

イ　交流及び共同学習の目標やねらいを明確にし，教育課程に位置付ける

「交流籍」を活用した交流及び共同学習は，教育活動の一環であり，その取組については授業を通して行われるものである。また，両校の児童生徒が，経験を広めて社会性を養ったり，多様性を尊重する心を育んだりできる活動である。その場に一緒にいるだけの単なる交流ではなく，有意義な活動にするためにも，学校としてねらいを明確にし，教育課程に位置付け，年間指導計画を立てて実施することが大切となってくる。

(3)　計画的・具体的な事前打合せの実施

ア　打合せの内容を明確にする

事前打合せを計画的・具体的に進めるためには，何を検討し，確認するのかを明確にすることが大切である。

打合せの内容を明確にしないまま行うと，細かな内容が決められなかったり，時間がかかったりするなど，具体性や効率性に欠けた打合せになってしまう。その結果，当日の交流及び共同学習がスムーズに行われず，お互いの児童生徒が十分に活動できずに終えてしまうことにもつながる。そこで，打合せを行う前に，何を話し合うのか明らかにしておくことが必要である。

イ　できるかぎり直接会って打合せを行う

打合せを実施する際には，できるかぎり直接顔を合わせて行うことが大切である。直接会うことで，具体的な情報交換や活動内容の検討・確認等がスムーズに行われることにつながる。しかしながら，様々な理由により，直接会って打合せを行うことが難しい場合には，電話やFAX，メール等を有効活用し，共通理解を図っていくことが必要である。

ウ　両校の児童生徒について具体的な情報交換を行う

交流及び共同学習を充実したものにするためには，両校の児童生徒について具体的な情報交換を行うことが必要である。

児童生徒の得意なことや興味関心のあること，配慮事項等を具体的に確認することで，当日の活動内容が決めやすくなったり，支援方法を共有したりすることができる。適切な目標等を設定する際にも有効である。

エ　授業用打合せシートを活用する

事前の打合せを行う際，当日のねらいや活動内容，支援方法等が記入できるシートがあると便利である。

シートを活用することで何を検討すべきかが明確になり，当日に向けて具体的な打合せや共通理解が図りやすくなる。どうしても打合せの時間が取れなかったり，学校間が遠距離であったりする場合にも，シートを活用しながら電話やFAX，メール等で連絡を取り合うことで，打合せが行いやすくなる利点がある。

(4)　具体的な学習内容や活動内容の工夫

ア　特別支援学校の児童生徒が得意な活動や興味関心がある活動を取り入れる

当日の活動を行う際には，特にも特別支援学校の児童生徒が得意な活動や興味関心のある活動，十分に取り組める活動を取り入れることが必要である。

それらの活動を取り入れることで，自分から進んで取り組んだり，友達と協力して取り組んだりするなど，当該児童生徒がもっている力や良さの発揮が可能になる。

イ　両校の児童生徒が主体的に活動できるような工夫をする

事前学習や事後学習も含め，全ての活動において児童生徒が主体的に活動できる工夫を行うことが必要である。

児童生徒が様々な活動の目的や内容を理解して取り組むことで，交流や学習がより深まると考える。受け身の活動にならないよう見通しをもって行動できるようにしたり，児童生徒自身が活動計画を立てたりするなど，一人一人が自分から活動に取り組めるようにすることが大切である。

ウ　評価記録シートを活用する

当日の活動または事後学習が終了した際には，次回のより良い取組に向け，実施した交流及び共同学習について評価を行うことが大切である。そのためには，何をどのように評価し，振り返れば良いのかが明らかなシートを準備し，活用することで次回の活動等につながる評価が可能になる。

４　「交流籍」を活用した交流及び共同学習を計画的・組織的に推進するための手立てを取り入れた実践

(1)　実践の概要

県立花巻清風支援学校小学部２年生男子児童１名は，北上市立いわさき小学校２年生の児童17名と，県立花巻清風支援学校中学部２年生男子生徒１名は，花巻市立南城中学校特別支援学級の生徒４名と交流及び共同学習を行った。

各校の実態に応じて，現在の校内体制を生かしながら，主に計画的・具体的な事前打合せの実施と具体的な学習内容や活動内容の工夫を取り入れ，実践を行った。

(2)　北上市立いわさき小学校における実践①

ア　事前打合せの取組

(ｱ)　直接会って打合せ（７月）

花巻清風支援学校の担任がいわさき小学校を訪問し，担任同士が直接会って１回目の打合せを行った。花巻清風支援学校の児童は，昨年度も，いわさき小学校１年生と交流及び共同学習を行っていたが，今年度いわさき小学校の担任が替わったこともあり，直接会って打合せを実施した。当日は，いわさき小学校の副校長も同席し，共通理解を図った。

打合せの内容は，両校の児童の特徴や日常の様子についての情報交換，保護者の希望の確認，年間行事予定を使用しての実施回数と実施日時の検討，実施する教科・領域と主な活動内容等の検討であった。

打合せの結果，８月にプールでの活動を行い，11月に畑に植えたさつまいもの収穫にかかわる活動に取り組むことを確認した。また，当日に向けて，今後は授業用打合せシート等を活用しながら電話やFAXで連絡を取り合うことを確認した。

実際に顔を見て打合せをすることで,児童の具体的な様子について情報を共有できたり,

それらの情報を基に当日の活動内容について，検討・確認を行ったりすることができた。

(ｲ)　電話やFAXによる打合せ（８月）

その後，担任同士で８月に行うプールでの水遊びについて，電話やFAXを使用して連絡を取り合った。

いわさき小学校の担任が作成した授業用打合せシートを基に，当日の学習活動や花巻清風支援学校の児童の活動にかかわる具体的な様子について，さらに情報交換を行い，準備を進めた。

イ　当日の様子（８月　体育：「プールで水遊び」）

(ｱ)　活動内容の工夫

いわさき小学校のプールを使用して，宝探し，ジャンケン列車，おにごっこ等を行った。花巻清風支援学校の児童は水遊びが好きであり，友達と手をつなぐことができる，おに遊びの経験があるなどの情報を生かし，本人が楽しめる活動を取り入れて実施した。また，テンポ良く複数の活動を組み合わせて実施し，両校の児童がそれぞれの活動に意欲的に取り組める工夫がなされていた。

(ｲ)　児童の様子

花巻清風支援学校の児童は，すべての活動に取り組むことができ，笑顔を見せながら楽しそうに活動していた。いわさき小学校の友達とも，手をつないだり，声がけに応じたりするなどかかわる場面も多く見られた。

いわさき小学校の児童も，楽しく水遊びをしながら体を動かしていた。昨年も交流していたこともあり，花巻清風支援学校の児童にも自然な形でかかわり，共に学習に参加している様子が多くの場面で見られた。

(3)　北上市立いわさき小学校における実践②

ア　事前打合せの取組（11月）

２回目の交流及び共同学習に向けて，小学校の担任が授業用打合せシートを作成した。そのシートを基に電話やFAXを使用して検討を行い，当日のねらいや学習の流れ，支援等について共通理解を図りながら準備を進めた。（Ｐ.14【図５】）

イ　当日の様子（11月　生活科：「やさいをしゅうかくしよう」）

(ｱ)　活動内容の工夫

いわさき小学校の家庭科室を使用して，収穫したさつまいもを調理し，スイーツづくりを行った。

安全面の配慮と一人一人が十分に活動できるように児童が行う活動を絞り込み，さつまいもを小さく切ることと，ビニール袋にさつまいも，パイナップル，生クリームを入れ，自分でもみながら混ぜるという活動を取り入れた。また，さつまいもを収穫した時の写真をあらかじめ掲示し，切ったさつまいもを煮ている時間を使って，写真を見ながら収穫した時の活動を振り返ったり，特別支援学校の児童に様子を知らせたりできるように工夫した。

(ｲ)　児童の様子

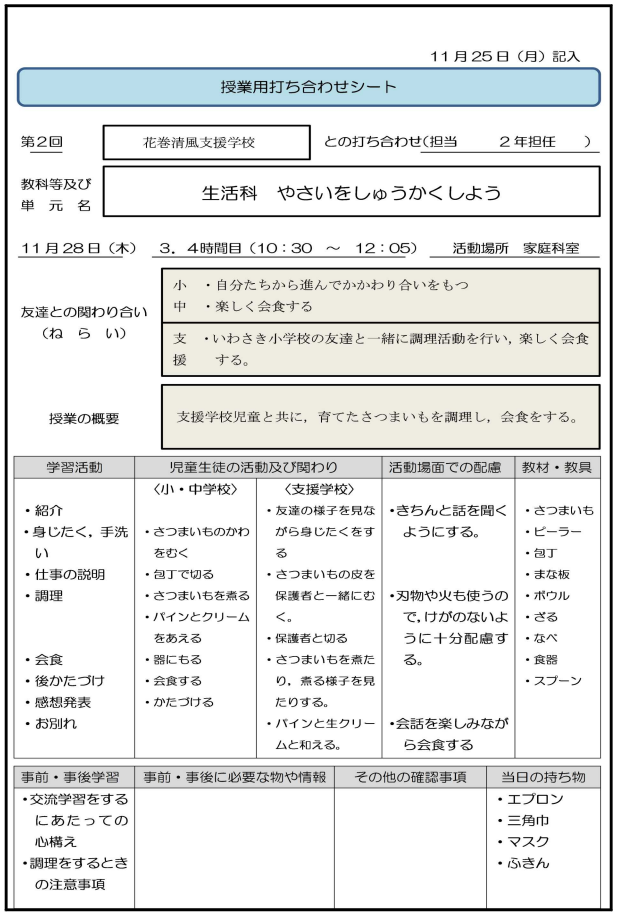
花巻清風支援学校の児童は，一緒に参加した母親と共に取り組みながら，自分でできるところは積極的に活動に取り組んだ。いわさき小学校の友達が調理している様子をじっと見ている姿も見られた。

いわさき小学校の児童も，自分の仕事や役割を理解し，意欲的に調理活動に取り組んでい

た。また，授業が始まる前，花巻清風支援学校の児童が，緊張からか家庭科室に入室できないでいたが，いわさき小学校の児童が優しく声をかけ促すことによって，入室することができたという場面も見られた。

ウ　評価記録シートの活用

交流及び共同学習が終了後，両校の担任は，それぞれ評価記録シートを活用し，ねらいにかかわる児童の学習活動の様子や気付いたことなどを記入した。記入した内容は，学期の評価や次年度の活動を検討する上での資料として生かせるものである。（【図６】）



11月25日（月）記入

授業用打ち合わせシート

第2回　花巻清風支援学校　との打ち合わせ(担当　２年担任　)

教科等及び単元名：生活科　やさいをしゅうかくしよう

11月28日（木）　3，4時間目（10：30 ～ 12：05）　活動場所　家庭科室

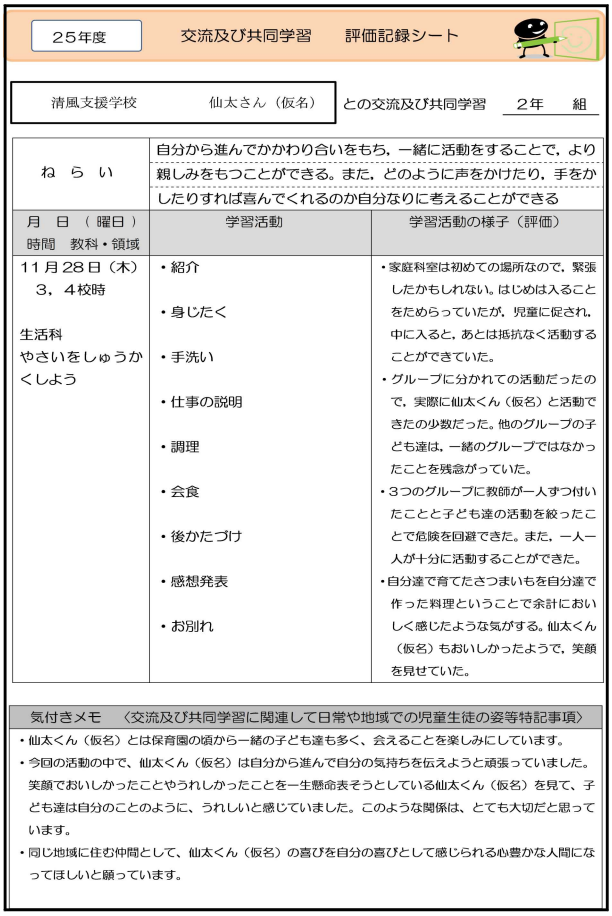
友達との関わり合い（ねらい）
小・中：・自分たちから進んでかかわり合いをもつ・楽しく会食する
支援：・いわさき小学校の友達と一緒に調理活動を行い，楽しく会食する。

授業の概要：支援学校児童と共に，育てたさつまいもを調理し，会食をする。

学習活動	児童生徒の活動及び関わり〈小・中学校〉	児童生徒の活動及び関わり〈支援学校〉	活動場面での配慮	教材・教具
・紹介 ・身じたく，手洗い ・仕事の説明 ・調理 ・会食 ・後かたづけ ・感想発表 ・お別れ	・さつまいものかわをむく ・包丁で切る ・さつまいもを煮る ・パインとクリームをあえる ・器にもる ・会食する ・かたづける	・友達の様子を見ながら身じたくをする ・さつまいもの皮を保護者と一緒にむく。 ・保護者と切る ・さつまいもを煮たり，煮る様子を見たりする。 ・パインと生クリームと和える。	・きちんと話を聞くようにする。 ・刃物や火も使うので，けがのないように十分配慮する。 ・会話を楽しみながら会食する	・さつまいも ・ピーラー ・包丁 ・まな板 ・ボウル ・ざる ・なべ ・食器 ・スプーン

事前・事後学習	事前・事後に必要な物や情報	その他の確認事項	当日の持ち物
・交流学習をするにあたっての心構え ・調理をするときの注意事項			・エプロン ・三角巾 ・マスク ・ふきん

【図５】作成した授業用打合せシート



25年度　交流及び共同学習　評価記録シート

清風支援学校　仙太さん（仮名）　との交流及び共同学習　２年　組

ねらい：自分から進んでかかわり合いをもち，一緒に活動をすることで，より親しみをもつことができる。また，どのように声をかけたり，手をかしたりすれば喜んでくれるのか自分なりに考えることができる

月　日（　曜日） 時間　教科・領域	学習活動	学習活動の様子（評価）
11月28日（木） 3，4校時 生活科 やさいをしゅうかくしよう	・紹介 ・身じたく ・手洗い ・仕事の説明 ・調理 ・会食 ・後かたづけ ・感想発表 ・お別れ	・家庭科室は初めての場所なので，緊張したかもしれない。はじめは入ることをためらっていたが，児童に促され，中に入ると，あとは抵抗なく活動することができていた。 ・グループに分かれての活動だったので，実際に仙太くん（仮名）と活動できたの少数だった。他のグループの子ども達は，一緒のグループではなかったことを残念がっていた。 ・３つのグループに教師が一人ずつ付いたことと子ども達の活動を絞ったことで危険を回避できた。また，一人一人が十分に活動することができた。 ・自分達で育てたさつまいもを自分達で作った料理ということで余計においしく感じたような気がする。仙太くん（仮名）もおいしかったようで，笑顔を見せていた。

気付きメモ　〈交流及び共同学習に関連して日常や地域での児童生徒の姿等特記事項〉
・仙太くん（仮名）とは保育園の頃から一緒の子ども達も多く、会えることを楽しみにしています。
・今回の活動の中で、仙太くん（仮名）は自分から進んで自分の気持ちを伝えようと頑張っていました。笑顔でおいしかったことやうれしかったことを一生懸命表そうとしている仙太くん（仮名）を見て、子ども達は自分のことのように、うれしいと感じていました。このような関係は、とても大切だと思っています。
・同じ地域に住む仲間として、仙太くん（仮名）の喜びを自分の喜びとして感じられる心豊かな人間になってほしいと願っています。

【図６】小学校の担任が記入した評価記録シート

(4)　花巻市立南城中学校における実践①

ア　事前打合せの取組

(ｱ)　直接会って打合せ（９月）

花巻清風支援学校の担任が南城中学校を訪問し，担任同士が１回目の打合せを行った。花巻清風支援学校の生徒は，昨年度も南城中学校の特別支援学級の生徒と交流及び共同学習を行っているが，あらためて直接会って打合せを実施した。

南城中学校の特別支援学級の担任より，今年度の交流及び共同学習の目的や年間の交流日時，活動内容等が書かれた実施計画書（案）が出され，それを基に打合せを進めた。

打合せの内容は，両校の生徒の特徴や日常の様子についての情報交換，保護者の希望の確認，年間行事予定を使用しての実施回数と実施日時の検討，実施する教科・領域と主な活動内容等の検討であった。

打合せの結果，９月に調理実習を行い，10月には作業学習でコースターの製作に取り組み，10月末には南城中学校の文化祭を見学することとした。また，今後は，電話やFAXで連絡を取り合うことを確認した。

(ｲ)　電話による打合せ（９月）

その後，担任同士で９月に行う調理実習について，電話を使用して連絡を取り合った。学習活動の内容や流れ，必要物品等の確認を行い，当日に向けて準備を進めた。

イ　当日の様子（９月　生活単元学習：調理実習）

(ｱ)　活動内容の工夫

南城中学校の家庭科室を使用して，カスタードプディングと白玉豆腐団子づくりに取り組んだ。

花巻清風支援学校の生徒は，プディングが好きであり，様々な調理活動の経験があるなどの情報を生かし，本人が取り組むことができる活動を取り入れながら実施した。また，めあてや活動の流れ，プディングや白玉豆腐団子の作り方を紙板書で黒板に提示し，どの生徒も見通しをもって取り組めるように工夫がなされていた。

(ｲ)　生徒の様子

花巻清風支援学校の生徒は，玉子を混ぜたり，友達と豆腐をつぶしたりするなど，活動内容や自分の役割を理解し，意欲的に取り組む姿が見られた。

南城中学校の生徒も，自分の担当の活動を進めながら，花巻清風支援学校の生徒にかかわり，時には共同で調理活動を進める様子が見られた。

(5)　花巻市立南城中学校における実践②

ア　事前打合せの取組

(ｱ)　電話とFAXによる打合せ（12月）

10月に予定していた２回目の交流及び共同学習は，台風のため実施することができなかった。そこで，再度日程を調整し，12月に行うこととした。

学習内容及び活動内容は，９月の打合せで確認した通りコースター製作に取り組むこととした。中学校の担任が作成した授業用打合せシートを基に，電話とFAXで連絡を取り合い，当日に向けて準備を進めた。（Ｐ.16【図７】）

イ　当日の様子（12月　作業学習：山の幸染めコースターづくり）

(ｱ)　活動内容の工夫

南城中学校の特別支援学級の教室で，山の幸染めコースターづくりに取り組んだ。

南城中学校の生徒は，作業学習として継続的に取り組んできた活動であったが，花巻清風支援学校の生徒には初めての取組であった。そこで，教師が手順を実際にやって見せ，作り方のイメージや見通しをもてるようにした。また，事前に材料の大きさをそろえたり，量をたくさん準備したりするなど，スムーズに行えるようにした。さらに，製作に当たっては，事前打合せの段階でアイロンの使用が可能かどうかを確認し，アイロンで上から押しつける活動をできるだけ一人で行うようにした。

(ｲ)　生徒の様子

花巻清風支援学校の生徒は，アイロンがけが終わり，コースターがきれいに仕上がっていくのを見るたびに，大きな声を上げて喜ぶ姿が見られた。時間を十分に使って活動に取り組むことができ，多くのコースターを製作することができた。

南城中学校の生徒も，これまで取り組んできた経験を生かして，自分なりに工夫しながら取り組む様子が見られた。製作後の感想発表では，花巻清風支援学校の生徒の作った製品について感想を話す生徒もいた。

ウ　評価記録シートの活用

交流及び共同学習が終了後，両校の担任は，それぞれ評価記録シートを活用し，ねらいにかかわる生徒の学習活動の様子や気付いたことなどを記入した。記入した内容は，学期の評価や次年度の活動を検討する上での資料として生かせるものである。（【図８】）

授業用打ち合わせシート

第2回　花巻清風支援学校　との打ち合わせ（担当　南城中担任　）

教科等及び単元名：作業学習　山の幸染めコースターづくり

12月13日（金）　5時間目（13：35　～　14：25）　活動場所　特別支援学級

友達との関わり合い（ねらい）
- 小中：・作業の手順を教えながら，一緒に作品づくりを行う。
- 支援：・作業の手順を理解し，リラックスしながら一緒に活動に取り組む。

授業の概要：・身近にある木の葉っぱを使って山の幸染めコースターを作る。葉の名前や葉脈についても学び合う。

学習活動	児童生徒の活動及びかかわり〈小・中学校〉	児童生徒の活動及びかかわり〈支援学校〉	活動場面での配慮	教材・教具
木の葉の紹介	どこで拾ったのか木の葉を紹介する。	どこで拾ったのか木の葉を紹介する。		・木の葉 ・アイロン ・山の幸染めセット
山の幸染め手順を確認しあう	交流生徒に手順を教える。やってみせる。	どのように染めるのか知る。		
染色紙を選ぶ	何色がよいか一緒に考える。	好きな色を答える。		
染める	アイロンを使うとき，危なくないように見守る。		アイロンでやけどをしないように注意する。	
鑑賞				

事前・事後学習	事前・事後に必要な物や情報	その他の確認事項	当日の持ち物
木の葉を拾って押し葉を作っておく。	１回目の交流の際，どんな作品になるのかイメージがもてるよう作品を見せる。		木の葉の落ち葉

【図７】作成した授業用打合せシート

２５年度　交流及び共同学習　評価記録シート

清風支援学校　徳士さん（仮名）　との交流及び共同学習　特別支援学級

ねらい
- 山の幸染めを通して生徒自らきれいな製品を製作しようとする意欲を示し，
- 道具等をゆずり合いながら使用することができる。
- 完成した作品を鑑賞し合うことにより，お互いに評価しあうことができる。

月日（曜日）時間　教科・領域	学習活動	学習活動の様子（評価）
12月13日（金）５校時（13:35～14:25） 作業学習	○山の幸染めコースターの製作 ・葉っぱ等の名前を知る	・何の葉っぱかを想像することができた。
	・山の幸染めで使用する ・材料等の用具の名前を知る	・どのように使用するかイメージすることができた。
	・染める手順を知る ・アイロンを使用するときの注意点を確認する ・山の幸染めをする	・染める順番を覚えることができた。 ・コースターのデザインを考えながら葉っぱを配置することができていた。 ・アイロンをあてる活動もタイマーを使用して，取り組むことができた。
	○お互いの製品を鑑賞し合う ・作り終えての感想 ・お気に入りのコースター ・友達のコースターで好きなもの	・体験しての感想や友達の製品の感想を話したり，好きな一枚を選んだりすることができた。

気付きメモ　〈交流及び共同学習に関連して日常や地域での児童生徒の姿等特記事項〉

・１１月に行われたふれあい文化祭の展示会場で会い，声をかけることができた。９月の交流から２か月がたっていたが，体が大きく成長しており、表情もおだやかで、本人とは気付かないほどだったが，本校生徒が気付き声をかけた。お互いに覚えている様子が見られ、ふれあうことができた。

担任名　特別支援学級担任

【図８】中学校の担任が記入した評価記録シート

５　実践結果の分析と考察

(1)　アンケート調査の目的と内容

「交流籍」を活用した交流及び共同学習を計画的・組織的に推進するための手立ての有効性や改善点等を明らかにするために，県立花巻清風支援学校の教員及び研究協力校の教員にアンケート調査を行った。

アンケート調査の内容と方法，処理，解釈の仕方等は【表６】に，アンケートの設問については【表７】に示すとおりである。

【表６】アンケート調査の内容と方法

	調査内容	対象	調査方法	処理・解釈の仕方
1	計画的・具体的な事前打合せの実施についての有効性及び改善点	花巻清風支援学校の教員 研究協力校の教員	自由記述の質問紙法（設問１，２）	記述内容から手立ての有効性及び改善点等について，分析・考察をする
2	具体的な学習内容や活動内容の工夫についての有効性及び改善点		自由記述の質問紙法（設問３，４）	
3	学校体制づくりについての有効性及び改善点		自由記述の質問紙法（設問５，６）	
4	「交流籍」を活用した交流及び共同学習に対する理解についての変容の状況と今後の取組		自由記述の質問紙法（設問７）	

【表７】アンケート調査の設問内容

設問番号	設問内容
1	直接会って事前打合せを実施し，児童生徒の具体的な情報交換を行ったことについて，成果と思われる点は何か。また，改善すべき点は何か。
2	授業用打合せシートを活用し，事前の打合せを行ったことについて，成果と思われる点は何か。また，改善すべき点は何か。
3	特別支援学校の児童生徒が得意な活動や興味関心がある活動を取り入れ，特別支援学校と小・中学校の両校の児童生徒が主体的に活動できるような工夫を行ったことについて，成果と思われる点は何か。また，改善すべき点は何か。
4	評価記録シートを活用したことについて，成果と思われる点は何か。また，改善すべき点は何か。
5	実践を通して，校内体制について，成果と思われる点は何か。また，改善すべき点は何か。
6	実践を進めるに当たり，ねらいを明確にし，教育課程に位置付けて実践したことについて，成果と思われる点は何か。また，改善すべき点は何か。
7	実践を通して，校内での「交流籍」を活用した交流及び共同学習の目的や意義，手続きや進め方等の理解が図られたか。また，今後，理解を深めるために行うべきことは何か。

(2)　調査結果の分析と考察

ア　計画的・具体的な事前打合せの実施について

設問１：直接会って事前打合せを実施し，児童生徒の具体的な情報交換を行ったことについて，成果と思われる点は何か。また，改善すべき点は何か。

〈主な回答〉

・直接会うことで，年間の予定を決めることができたり，児童の身辺自立等の状況や配慮点を確認したり，具体的な情報交換を行うことができた。

・直接会って話し合うことは，電話やFAXより具体的な情報が得やすく，当日の活動を考える上で参考になった。

・直接会うことで，電話よりも落ち着いて,思ったことや考えたことの話し合いができた。

・日程調整に多少の苦労はあるが，直接会うことは必要なので行うべきだと思う。

・直接会うということに対して思いきりが大切だと思う。どちらかの学校が積極的であること，または，学校間の距離が近い場合は必ず会うものと決めておくと良いと思う。

〈成果〉

・直接会って打合せをすることで,児童生徒の身辺自立等の状況や配慮点を確認できたり,それらの情報を基に当日の活動を考えたり，具体的な話し合いを進めるに当たって，成果が見られた。

〈改善すべき点〉

・直接会って打合せができるよう積極的であること，学校間の距離が近い場合は必ず会って打合せをするように決めておくことが必要などの意見が述べられていた。

以上のことから，日程調整の難しさはあるが，学校間で連絡を取り合い，できるだけ直接会って事前打合せができるよう積極的に行動していくことが望ましいと考える。

設問２：授業用打合せシートを活用し，事前の打合せを行ったことについて，成果と思われる点は何か。また，改善すべき点は何か。

〈主な回答〉

・授業用打合せシートは，細かなところまで確認できる良さがあった。また，電話やFAXでのやりとりをする際に，シートを活用したことで共通理解がしやすかった。

・活動内容や誰がどのように行動し，支援をするのかなどのイメージ化が図られた。ねらいも明確になり，漠然とした活動にならなかった。

・様式について,「活動面の配慮」の欄は，小・中学校と特別支援学校の両方を分けて記入できると良いのではないか。また,「授業の概要」の欄を書く際には，箇条書きで書くと良いのではないか。

〈成果〉

・授業用打合せシートは,当日のねらい,活動内容,配慮事項等を確認することに役立ち,さらには，電話やFAXでの連絡の際にも活用することができ，打合せを進める上で成果が見られた。

〈改善すべき点〉

・記入する欄の様式や書き方を修正・改善する必要性が述べられていた。

以上のことから，さらに活用しやすいように様式等を修正・改善していく必要がある。

イ　具体的な学習内容や活動内容の工夫について

設問３：特別支援学校の児童生徒が得意な活動や興味関心がある活動を取り入れ，特別支援学校と小・中学校の両校の児童生徒が主体的に活動できるような工夫を行ったことについて，成果と思われる点は何か。また，改善すべき点は何か。

〈主な回答〉

・初めての打合せの際，本人の好きな活動やできる活動を確認することができ，その情報を活用して活動内容を設定した。結果,友達と一緒に楽しく遊ぶ姿が多く見られた。

・簡単な調理活動を行ったが，両校の児童は食べることが好きなので，活動内容を理解して意欲的に取り組むことができた。

・グループ活動が主であったときも，一人で取り組む活動も加えて設定することで，活動量を確保することができた。

・特別支援学校で普段やっている教材を取り入れることも良いのではないか。

・その場限りの交流及び共同学習で終わるのではなく，児童生徒本人たちが「交流して良かったな」と思えるやりとりや，次年度にも続くようなやりとりができると良いと思う。

〈成果〉

・事前打合せの情報交換を生かして，学習内容や活動内容を工夫することで，両校の児童生徒がかかわり合いながら，主体的に活動に取り組むという成果が見られた。

〈改善すべき点〉

・活動内容に特別支援学校で行っている教材を取り入れたり，児童生徒本人たちが交流の良さを感じられるような取組を行ったりする工夫の必要性が述べられていた。

以上のことから，両校の児童生徒が主体的に活動に取り組み，お互いにつながりを意識できるよう，事前，事後の活動も含めた学習内容や活動内容の工夫が必要と考える。

設問４：評価記録シートを活用したことについて，成果と思われる点は何か。また，改善すべき点は何か。

〈主な回答〉

・児童生徒の様子を思い浮かべて記入することで，当日の活動について振り返ることができた。

・評価記録シートに記入した内容は，学期の評価等に結びつけやすいものであった。また，次回の取組に向けての資料に生かせると感じた。

・評価記録シートを書くことで，支援学校の生徒の理解が深まった。

・評価記録シートに書かれた内容を基に，しっかりと評価をする場があると良いと思う。

・両校の担任同士の振り返り，反省，評価の場があればなお良いと思う。

〈成果〉

・評価記録シートを書くことで，当日の活動や児童生徒の様子を振り返ることができ，評価や次の活動につなげるための資料としても活用できるという成果が見られた。

〈改善すべき点〉

・評価記録シートへ記入するだけで終わるのではなく，両校の担任同士で評価を行うことの必要性が述べられていた。

以上のことから，評価記録シートは，児童生徒の様子を振り返るための記録として活用することとし，具体的な評価については，小・中学校及び特別支援学校の先生方が共通の視点で評

価を行えるシート等を活用しながら，共に行っていく必要がある。その結果として，学習内容や活動内容の工夫につながるものと考える。

ウ　学校体制づくりについて

設問５：実践を通して，校内体制について，成果と思われる点は何か。また，改善すべき点は何か。

〈主な回答〉

・管理職の理解があり，いろいろな相談に対応してくれて安心して取り組むことができた。また，前年度の担任からの情報もあり，有効に生かすことができた。

・調理活動の際，グループ活動を中心に行ったが，養護教諭の先生に協力してもらい，スムーズに行うことができた。

・事前打合せを早めに行い，日程を決定したことで補充体制を組むことができた。日程を職員室のホワイトボードに記入することで，情報が共有化され，体制が組みやすくなった。

・特別支援学校においては，いつ実施することになっても，日程が重複したり，年次や出張が重なるなど職員体制を組むのに難しさはある。しかしながら，早めに予定が分かることで少しは補充体制が組みやすくなると思う。

・学校として初めて実施する場合，最初は管理職や特別支援教育コーディネーターが窓口となり，関係づくりをすべきだと思う。窓口を明確にし，その後のやりとりについては，担任同士が直接行った方がよいと思う。

・初めて担当になる先生にとっては，どんなことをやったらいいのか分からず，戸惑うと思われる。そのような場合，やはり校内でのサポート体制が必要と思う。

〈成果〉

・管理職や周囲の教員の理解があることと，早めに両校で打合せを行い，日程等を確認することで，校内体制が整いスムーズな推進につながるという成果が見られた。

〈改善すべき点〉

・学校として初めて実施する場合や担任が初めて対応する際には窓口を明確にするなど，校内での推進体制を整える必要があるという意見が述べられていた。

以上のことから，小・中学校では，推進組織を明確にし，初めて実施する場合でもスムーズに対応できるよう役割分担を図りながら進めていく必要があると考える。特別支援学校では，担当を明確に位置付け，補充体制ができるだけとれるように日程を早めに決定するなどの工夫が必要と考える。

設問６：実践を進めるに当たり，ねらいを明確にし，教育課程に位置付けて実践したことについて，成果と思われる点は何か。また，改善すべき点は何か。

〈主な回答〉

・特別支援学校では特別活動に位置付け，個別の指導計画と関連づけて実施することができた。個別の指導計画に記載されていることで，手立てを確認し，意識しながら行うことができた。

・小学校では，交流のねらいも設定しながら，体育と生活科の学習を計画に沿って行うことができた。

・中学校特別支援学級では１回目は生活単元学習，２回目は作業学習で行った。単元計画

に沿って実施し，特別支援学校の生徒を意識した取組になるように進めることができた。

・小学校通常学級において，教科学習で交流を行う場合，低学年の場合は対応しやすいと思うが，高学年の場合は単元設定や単元計画をより吟味して進めていく必要があると思う。

〈成果〉

・それぞれの学校において，ねらいを明確にしながら，教育課程に位置付けることで，計画的に実施することができたという成果が見られた。

〈改善すべき点〉

・教科学習での交流を進めるために，単元設定等の工夫の必要性が述べられていた。

以上のことから，小学校通常学級で教科学習での交流を進める際には，できるだけ交流及び共同学習の日程を早めに決定し，教科の進度も考慮しながら，学習内容や活動内容を検討していく必要があると考える。

エ　「交流籍」を活用した交流及び共同学習に対する理解について

設問７：実践を通して，校内での「交流籍」を活用した交流及び共同学習の目的や意義，手続きや進め方等の理解が図られたか。また，今後，理解を深めるために行うべきことは何か。

〈主な回答〉

・小・中学校において，朝の打合せや職員会議等を利用して周囲に知らせることで，日時や活動内容を理解してもらった。しかしながら，「交流籍」を活用した交流及び共同学習について理解が広まったかというと難しい面があった。

・特別支援学校においては，本格実施が２年目ということもあり，昨年よりはイメージ化が進んだ。昨年はマニュアルが欲しいという声があったが，昨年の経験を生かし，手続き等を進めることができた。

・小・中学校の場合，担任が替わればまた進め方を理解してもらうことが必要な状況になる。そのためには，見て分かるような資料等があると助かると思う。

・手続きや実施する際の流れ等の共通理解を図るためには，やはりガイドブック等何らかの資料があるとよいと思う。年度初めに校内で確認するために，必要な部分をコピーして活用することがあってもよいと思う。

〈理解の状況〉

・校内全体における「交流籍」を活用した交流及び共同学習についての目的や意義等の理解については，難しい面が見られたが，担当者における手続きや進め方についての理解にはつながった。

〈今後行うべきこと〉

・校内で共通理解を図ることができ，担当になってもすぐ対応できるような資料の必要性が述べられていた。

以上のことから，資料を活用しながら校内での共通理解を図り，管理職も含めすべての教職員の理解と協力の下に実施できるよう進めていくことが望ましいと考える。

６　「共に学び，共に育つ教育」の推進に関する研究のまとめ

ここでは，「共に学び，共に育つ教育」の実現に向けた一つの取組である「交流籍」を活用した交流及び共同学習において，本研究で設定した計画的・組織的に推進するための手立てに基づいた実践，及び実践にかかわるアンケート調査の分析・考察から成果と課題をまとめる。

(1)　成果

ア　事前打合せにおいて，直接会って話し合いを行ったり，授業用打合せシートを活用して電話やFAXでやりとりを行ったり，具体的な情報交換を行いながら検討・確認を積み重ねた。その結果，ねらいや活動内容，支援方法等を明確にすることができ，計画的な交流及び共同学習の推進につながった。

イ　具体的な学習内容や活動内容の工夫において，事前打合せでの情報を基に，特別支援学校の児童生徒が得意な活動や興味関心のある活動を取り入れ，両校の児童生徒が主体的に取り組むための支援を行った。その結果，両校の児童生徒がかかわり合いながら，主体的に活動に取り組むという姿が見られた。

ウ　学校体制づくりについて，実践を行う各学校の実状に応じて，ねらいを明確にし，教育課程に位置付けて交流及び共同学習を実施した。その結果，管理職をはじめ，教職員の理解により，協力体制が図られ，当日の活動の充実につながった。さらに，計画的・組織的に実施するためには，校内の推進組織を明確にし，役割分担を図りながら推進していく必要性のあることが明らかになった。

エ　「交流籍」を活用した交流及び共同学習の理解を図ることについて，実践を行う各学校の実状に応じて実施した。その結果，管理職も含め，全職員で基本的な考え方や具体的な進め方を理解するための資料を活用しながら，共通理解を図っていく必要性のあることが明らかになった。

(2)　課題

基本的な考え方や具体的な進め方を理解するための資料の活用を図りながら，実践を積み重ね，成果と課題を明らかにしていく必要がある。そして，それらを踏まえて資料の改善等を行い，より計画的・組織的に推進するための方法についてさらに検討を加えていく。

７　「交流及び共同学習ガイドブック」の作成

(1)　作成のねらい

研究の成果を踏まえ，「交流籍」を活用した交流及び共同学習の計画的・組織的な推進に役立てるため，実践のポイント等を示したガイドブックを作成した。

(2)　内容と構成

ガイドブックの内容を，「理解編」「展開のポイント」「実践編」の三つに構成し，整理して示した。

「理解編」は，「交流籍」を活用した交流及び共同学習の目的や意義，手続きの流れ等について記載している。「展開のポイント」は，実施するための主要なポイントやその目的，必要性等に加え，打合せに関連する各種シートや授業の評価に生かすシートの記入ポイント，推進のための１年間の計画例等の実際を添付した。「実践編」は，交流及び共同学習の具体的な取組の様子等を記載している。

このように，ガイドブックを実践の参考にすることで，進め方のイメージや見通しがもちやすくなり，課題や改善点を適宜修正しながら，実際の取組に生かすことができるよう配慮した。

(3)　活用方法

目次の次頁に１年間の進め方のモデルケースとして「交流籍」を活用した交流及び共同学習の進め方ガイドを示した。交流籍を置く小・中学校の決定や連絡の流れ，特別支援学校と小・中学校の打合せの進め方，事前学習，交流及び共同学習の実施，事後学習，評価や改善による反省や次年度に向けた打合せ等の実際について簡潔に説明し，必要に応じて関連する頁で内容を確認することができるよう工夫した。

また，校内で共通理解を図るために「理解編」の各頁を校内研修会の資料として活用したり，「展開のポイント」の各頁を学校や校内の担当者，担任等のニーズに応じて読み進め，自校の交流及び共同学習の展開に関連付けて役立てたりすることも可能である。

ガイドブックの巻末には，交流籍希望申請に関連する各種様式，「交流籍を活用した交流及び共同学習実施計画書」「授業用打合せシート」「授業用評価シート」等の様式を掲載しており，適宜，文書の作成等にも活用することができる。

Ⅳ　研究のまとめ

本研究は，平成24年度の「交流籍」を活用した交流及び共同学習の取組の検証を行い，成果と課題を明らかにし，それらを踏まえて，交流及び共同学習を計画的・組織的に実施するための取組やその進め方を提示することを通して，「共に学び，共に育つ教育」の推進に役立てようとしたものである。以下，研究の成果と今後の課題を述べる。

１　研究の成果

(1)　「共に学び，共に育つ教育」の推進に関する基本構想

「共に学び，共に育つ教育」を推進する一つの取組である「交流籍」を活用した交流及び共同学習を計画的・組織的に実施するための基本的な考え方と，その方法を提示するための手順を基本構想としてまとめることができた。

(2)　岩手県における平成24年度の「交流籍」を活用した交流及び共同学習の取組の検証

研究の基本構想に基づき，平成24年度に行った県内の「交流籍」を活用した交流及び共同学習の取組の検証を行った。特別支援学校から出された成果と課題の記述内容を分析・考察し，取組全体の成果と課題，さらにはその要因と改善の方向性を明らかにすることができた。

また，それらを基に，「交流籍」を活用した交流及び共同学習を計画的・組織的に推進するための要件を整理することができた。

(3)　「交流籍」を活用した交流及び共同学習を計画的・組織的に推進するための手立ての設定

平成24年度の取組の検証を踏まえて整理された要件に即して，「交流籍」を活用した交流及び共同学習を計画的・組織的に推進するための手立てを設定することができた。

(4)　「交流籍」を活用した交流及び共同学習を計画的・組織的に推進するための手立てを取り入れた実践

計画的・組織的に推進するための手立てを取り入れながら，研究協力校による実践を行った。手立てを取り入れた実践を行うことで，小・中学校と特別支援学校の両校の児童生徒が自然な形でかかわりながら，主体的に活動する姿が見られた。

(5)　実践結果の分析と考察

研究協力校等の教員の実践や意見から，「交流籍」を活用した交流及び共同学習を計画的・組織的に推進するための手立てを実施したことで,具体的な事前打合せが行われたり，児童生徒が共に活動しながら主体的に学ぶ姿が見られたりなどの成果を得ることができた。また，今後の取組に向けてより良い推進方法の方向性を明らかにすることができた。

(6)　「共に学び，共に育つ教育」の推進に関するまとめ

岩手県における平成24年度の「交流籍」を活用した交流及び共同学習の取組の検証を基に設定した手立てを取り入れた実践を踏まえ，成果と課題をまとめることができた。また，研究成果物として，「交流及び共同学習ガイドブック」を作成することができた。

２　今後の課題

「共に学び，共に育つ教育」の推進に向け，今後さらに県内の「交流籍」を活用した交流及び共同学習の実践を継続的に積み重ね，それらを通して，より計画的・組織的に推進するための方法について探っていく必要がある。

＜おわりに＞

この研究を進めるに当たり，ご協力いただきました研究協力校の校長先生をはじめとする教職員の先生方に心からお礼を申し上げます。

【引用文献】

岩手県教育委員会(2009)『いわて特別支援教育推進プラン』Ｐ３

【参考文献】

岩手県発達障がい者支援体制整備検討委員会・広域特別支援連携協議会（2008)『岩手県における今後の特別支援教育の在り方（最終報告)』

全日本特別支援教育研究連盟（2013)『特別支援教育研究６月号Ｎｏ.670』東洋館出版社

特別支援教育の実践研究会編（2013)『特別支援教育の実践情報Ｎｏ.151』明治図書

文部科学省（2008)『交流及び共同学習ガイド』

文部科学省（2008)『幼稚園教育要領解説』

文部科学省（2008)『小学校学習指導要領解説　総則編』

文部科学省（2008)『中学校学習指導要領解説　総則編』

文部科学省（2009)『高等学校学習指導要領解説　総則編』

文部科学省（2009)『特別支援学校学習指導要領解説　総則等編』(幼稚部・小学部・中学部)

文部科学省初等中等教育局特別支援教育課（2007)『季刊　特別支援教育Ｎｏ.25』東洋館出版社

文部科学省初等中等教育局特別支援教育課（2010)『季刊　特別支援教育Ｎｏ.38』東洋館出版社

文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会「特別支援教育の在り方に関する特別委員会」報告（2012)『共生社会に向けてインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進』